

日汉对照·精装有声版

江戸川乱歩

短篇小说选

江戸川乱歩 著
钱晓波 译



華東理工大學出版社

HUAZHONG UNIVERSITY OF SCIENCE AND TECHNOLOGY PRESS

日汉对照 精装有声版

江戸川乱歩

短篇小说选

〔日〕江戸川乱歩 著
钱晓波 译



華東理工大學出版社
EAST CHINA UNIVERSITY OF SCIENCE AND TECHNOLOGY PRESS

· 上海 ·

图书在版编目(CIP)数据

江戸川乱歩短篇小说选(日汉对照·精装有声版) / (日) 江戸川乱歩著; 钱晓波译. —上海: 华东理工大学出版社, 2017.5 (2017.6重印)
ISBN 978-7-5628-4943-8

I. ①江… II. ①江…②钱… III. ①日语-汉语-对照读物
②短篇小说-小说集-日本-现代 IV. ①H369.4: I

中国版本图书馆CIP数据核字(2017)第041173号

策划编辑 / 王一佼

责任编辑 / 王一佼

音频制作 / 周海燕

特邀审校 / 詹莹靓

装帧设计 / 王翔

出版发行 / 华东理工大学出版社有限公司

地址: 上海市梅陇路130号, 200237

电话: 021-64250306

网址: www.ecustpress.cn

邮箱: zongbianban@ecustpress.cn

印 刷 / 上海中华商务联合印刷有限公司

开 本 / 787mm × 1092mm 1/32

印 张 / 6.125

字 数 / 98千字

版 次 / 2017年5月第1版

印 次 / 2017年6月第2次

书 号 / ISBN 978-7-5628-4943-8

定 价 / 36.80元

目录

译者导读 日本战前推理小说小史：乱步登场 / 001

 二钱铜货 / 006

 二钱铜币 / 007

译者解读 处女作《二钱铜币》 / 080

 白昼梦 / 082

 白日噩梦 / 083

 指环 / 100

 戒指 / 101

译者解读 《白日噩梦》与《戒指》

——乱步·林奇·润一郎 / 112

🎧 押絵と旅する男 / 116

🎧 与贴画一同旅行的男子 / 117

译者解读 浮世映梦映世浮

——浅析《与贴画一同旅行的男子》 / 186

扫描右侧二维码,添加“华东理工大学出版社”
微信公众号。

发送 jhc, 根据提示步骤操作, 获取双语音频。

华东理工大学出版社



扫码关注官方微信

译者导读

日本战前推理小说小史：乱步登场

一、乱步登场前的日本推理小说

美国小说家埃德加·爱伦·坡 (Edgar Allan Poe) 于 1841 年发表了《莫格街谋杀案》(The Murders in the Rue Morgue)。这部小说作为世界首部推理小说而被载入世界文学史册。由此，埃德加·爱伦·坡亦成为世界推理小说当仁不让的鼻祖。

1887 年 12 月，猿庭篁村将《莫格街谋杀案》翻译后刊载在《读卖新闻》，成为最早将爱伦·坡作品介绍到日本的作家。当时在日本，翻译小说盛行，除猿庭篁村外，黑岩泪香也是当时极负盛名的翻译家之一。黑岩泪香译介了凡尔纳、大仲马、雨果等作家创作的世界名著。同时其本人也热衷创作小说，1889 年 9 月发表在《小说丛》上的《无惨》则被称为日本首部推理小说。

不仅在大众文学领域，在纯文学领域中也有不少作家对日本推理小说的发展做出了杰出的贡献。比如，明治文学的巨匠森鸥外于 1913 年 6 月在《新小说》上翻译发表了爱伦·坡的《莫格街谋杀案》(以《医院小巷的杀人犯》为题)。被四次提名诺贝尔文学奖的唯美主义文学代表作家谷崎润一郎，更是在 20 世纪 20 年代前后集中创作了一大批具有推理小说雏形的文学作品。比如，《前科者》(1918 年)、《柳汤事件》

(1918年)、《人面疽》(1918年)、《被诅咒的戏曲》(1919年)、《途中》(1919年)、《某种犯罪的动机》(1922年)等。此外,纯文学作家佐藤春夫、林房雄、片冈铁兵等也都曾创作并在著名的大众文学刊物《新青年》上发表过推理小说。

欧美推理小说的译介以及日本推理小说的兴起都直接对江户川乱步的创作产生了推动作用。江户川乱步曾直言自己的创作深受谷崎润一郎的影响。比如《途中》这部作品,江户川乱步认为无论其新颖的叙事手法还是对于犯罪缜密的推理等,都完全可以和西方的同类小说相匹敌,是一部“值得日本引以为骄傲的侦探小说”。

明治、大正时代,这些小说家、翻译家将外国小说大量译介至日本,可以说在不同程度上对日本推理小说的发展起到了启蒙和推动作用。这些作品对少年时期的江户川乱步影响极大,直接推动其走上职业作家的生涯。而江户川乱步的登场,则为日本推理小说的发展开创了全新的局面,将日本战前推理小说推向高潮。

二、乱步登场

江户川乱步,原名平井太郎。1894年10月出生于三重县名张市。中学时代开始大量阅读押川春浪、黑岩泪香等创

作或翻译的小说，对于侦探、推理、怪奇、科幻等领域的文艺作品产生了相当浓厚的兴趣。乱步考入早稻田大学政治经济系专业后，依然对这些领域的文艺作品情有独钟，同时也大量阅读刑侦类专业书籍。从早稻田大学毕业后，乱步的工作经历极为丰富，尝试过各种职业。曾在贸易公司、造船厂、二手书店、面馆，甚至还在侦探事务所工作过。通过形形色色的社会工作，乱步积累了丰富的社会生活经验，这些均为其之后的小说创作提供了大量鲜活的素材。

江户川乱步对于世界推理小说的鼻祖埃德加·爱伦·坡极为推崇，这点从其笔名即可看出。江户川乱步即为埃德加·爱伦·坡日语读音的谐音，再配上汉字而成。

1923年12月，江户川乱步在《新青年》上发表了处女作——短篇小说《二钱铜币》，开始了自身推理小说的创作生涯，同时也将日本推理小说逐步推向新的高度。

《二钱铜币》的发表使得江户川乱步在日本推理小说界获得了相当高的评价。其后陆续在《新青年》上发表了《D坂杀人事件》《心理实验》等脍炙人口的名作。受爱伦·坡、柯南道尔等欧美推理作家的影响，乱步的初期作品多为“本格派”的类型，即通过侦探缜密的分析和细致的解读，对陷入谜团，难以捉摸的犯罪事实进行侦破，最终揭开犯罪之谜的过程。


乱步的“本格派”作品在推理小说界获得了赞许和肯定，然而，一般读者对此类专业性较强的侦探推理小说却似乎反应平平，大多数读者更热衷于具有怪奇、幻想、恐怖情节的小说。受此影响，乱步开始着手此类被称为“变格派”类型的小说创作。《人间椅子》《镜子地狱》等名作即属于“变格派”小说。乱步的“变格派”作品手法新颖、思路奇特，同样受到了推理小说界极高的评价，并受到读者广泛的欢迎。江户川乱步的这些成就使得其在短短几年便成为日本推理小说宗师级人物，为推理小说在日本的隆盛起到了相当大的作用。

1931年5月，《江户川乱步全集》共13卷由平凡社开始刊行，其销售量总计竟然达到24万册。江户川乱步作品受欢迎程度之高由此可见一斑。平凡社是以出版百科全书闻名的老牌出版社，据说当时已趋于没落，濒临倒闭，全靠乱步全集的出版发行获得了巨大的利润，才由此扭亏为盈。

作家的全集一般均在其去世后才会被整理出版，而江户川乱步生前就已在各出版社刊行了四次全集。这在日本文学界极为罕见，从中也可见乱步作品的魅力。

作为日本推理小说宗师级人物，江户川乱步可谓实至名归。无论是“本格派”抑或“变格派”，乱步构思奇特、推理严谨、环环相扣、机智惊险的作品在海内外赢得了极高的评价。

他所创造的侦探形象——明智小五郎脍炙人口，广受读者欢迎。江户川乱步在文学事业上获得了巨大成功，在日本推理小说史上留下了闪光的足迹，同时，也为战后乃至现代日本推理小说的发展和壮大打下了坚实的基础。


 にせんどうか
二銭銅貨

上

「あの泥坊が羨しい」二人の間にこんな言葉が交される程、其頃は窮迫していた。

場末の貧弱な下駄屋の二階の、ただ一間しかない六畳に、一閑張りの破れ机を二つ並べて、松村武とこの私とが、変な空想ばかり逞しゅうして、ゴロゴロしていた頃のお話である。

もう何もかも行詰ってしまつて、動きの取れなかつた二人は、丁度その頃世間を騒がせた大泥坊の、巧みなやり口を羨む様な、さもしい心持になっていた。

その泥坊事件というのが、このお話の本筋に大関係をもっているのです、ここにザッとそれをお話して置くことにする。

芝区のさる大きな電気工場の職工給料日当日の出来事であった。十数名の賃銀計算係が、一万に近い職工のタイム・カードから、それぞれ一ヶ月の賃銀を計算して、山と積まれた給料袋の中へ、当日銀行から引出された、

上

“那个贼可真令人羡慕。”从两人的会话中，便可体会那个时候我们是何其窘迫。

地处偏僻，外观破旧的木屐店二楼，在铺着六张榻榻米¹的一间和式小房间里，并排着两张破破烂烂的简易书桌。松村武和我无所事事，赖在榻榻米上，百无聊赖地做着宏大的白日梦。

两人一筹莫展，束手无策。不禁羡慕起那个将世间闹得沸沸扬扬的大盗。他的手段实在太过精妙，令人多少会产生点龌龊的念头。

说起那个大盗，倒和我要讲的这个故事有很大关系。需要在这里大致交代一下。

这事发生在芝区²某大型电器工厂发工资的日子。十几名负责劳资的工作人员根据全厂近一万名工人的考勤卡，计算出当月工资。当天从银行取来的二十日元、十日元、五日元

1 约十平方米。译者注。

2 东京的一个区。1947年后与麻布区、赤坂区合并为港区。译者注。

いちばん かばん いっぱい に じゅうえん じゅうえん ごえん
 一番の鞆に一杯もあろうという、二十円、十円、五円な
 どのさつを汗だくになって詰込んでいる最中に、事務所の
 げんかん ひとり しんし おどす
 玄関へ一人の紳士が訪れた。

うけつけ おんな らいい たず わたし あさ ひしんぶん きしや
 受付の女が来意を尋ねると、私は朝日新聞の記者であ
 るが、支配人にちょっとお眼にかかりたいという。そこで
 おんな とうきょうあさ ひしんぶんしやかいぶ きしや かたがき めいじ も
 女が、東京朝日新聞社会部記者と肩書のある名刺を持って、
 しはいにん こと つう
 支配人にこの事を通じた。

さいわい しはいにん しんぶん きしやそうじゅうほう
 幸なことには、この支配人は、新聞記者操縦法がうま
 いことを、一つの自慢にしている男であった。のみならず、
 しんぶん きしや あいて ほら ふ じぶん はなし なになにしだん
 新聞記者を相手に、法螺を吹いたり、自分の話は何々氏談
 などとして、新聞に載せられたりすることは、大人気ない
 おち だれ わる きもち しや
 とは思いながら、誰しも悪い気持はしないものである。社
 かいぶ きしや しょう おとこ こころよ しはいにん へや しょう
 会部記者と称する男は、むしろ快く支配人の部屋へ請
 じられた。

おお べつこうぶち めがね うつく くちひげ べつ き
 大きな鼈甲縁の眼鏡をかけ、美しい口髭をはやし、気
 の利いた黒のモーニングに、流行の折鞆といういでたち
 おとこ いか もの な ちようし しはいにん まえ い
 のその男は、如何にも物慣れた調子で、支配人の前の椅
 す こし おろ
 子に腰を下した。そしてシガレット・ケースから、高価な
 かみまきたばこ とりだ たくじょう はいざら そ
 エジプトの紙巻煙草を取り出して、卓上の灰皿に添えられた
 てぎわ す あおみ けわり しはいにん はな
 マッチを手際よく擦ると、青味がかつた煙を、支配人の鼻

纸币塞满了最大一个手提包。就在大家正大汗淋漓地将钱塞进堆成小山似的工资袋中的时候，办公室的门口来了一位绅士。

负责接待的女事务员询问其来意，答道，我是朝日新闻记者，有事想拜会下厂长。于是，女事务员拿着印有东京朝日新闻社会部记者的名片，将此事通报给了厂长。

幸好这个厂长自认为应付报社记者还比较在行。而且，在报社记者面前吹吹牛，在报上刊载某某氏谈之类的消息，虽不稳重，倒也没人讨厌这种事情。所以，自称社会部记者的这个男人，很顺利地就被请进了厂长的办公室。

戴着大大的玳瑁眼镜，留着优雅的小胡子，身着潇洒的黑色礼服，夹着一个流行的公文包，这个男人以一种相当老练的姿态在厂长面前的椅子上落座后，从雪茄盒中抽出一根昂贵的埃及卷烟，利落地用桌上烟缸旁的火柴点燃后，呼出一口青烟悠悠地朝厂长的鼻尖飘去。

先へフツと吹出した。

「貴下の職工待遇問題に関する御意見を」

とか、何とか、新聞記者特有の、相手の呑んでかかった様な、それでいて、どこか無邪気な、人懐っこい調子で、その男はこう切出した。

そこで支配人は、労働問題について、多分は労資協調、温情主義という様なことを、大いに論じた訳であるが、それはこの話に関係がないから略するとして、約三十分ばかり支配人の室に居った所の、その新聞記者が、支配人が一席弁じ終ったところで「ちょっと失敬」といって便所に立った間に、姿を消してしまったのである。

支配人は、無作法な奴だ位で、別に気にもとめないで、丁度昼食の時間だったので、食堂へと出掛けて行ったが、暫くすると近所の洋食屋から取ったピフテキか何かを頬張っていた所の支配人の前へ、会計主任の男が、顔色を変えて、飛んで来て、報告することには、

「貸銀支払の金がなくなりました。とられました」

と云うのだ。

驚いた支配人が、食事などはそのままにして、金のなくなつたと云う現場へ来て調べて見ると、この突然の盗難

“我想就职工待遇的问题听听您的意见。”

如此这般，男人以报社记者特有的、咄咄逼人，同时又明快、热络的口吻开始了采访。

于是，厂长就劳动问题，大概也就是诸如劳资协调、温情主义等高谈阔论了一番。这些话与本故事关系不大，暂且省略。报社记者在厂长办公室待了大约三十分钟，等厂长的演讲告一段落，说了声“失陪”便去了洗手间，谁知就此踪影皆无。

真是没礼数的家伙，厂长并未多想，正好到了午餐时间，便去了食堂用餐。正当厂长狼吞虎咽地吃着附近的西餐馆送来的牛排时，工厂的男会计主任惊慌失措、慌里慌张地赶来向厂长汇报：“支付工资的钱不见了。被盗了。”

厂长大吃一惊，放下未吃完的午餐，直奔失窃财物的现场进行勘察。对于这突如其来的盗窃事件，差不多能想象出

の仔細は、大体次の様に想像することが出来たのである。

丁度其当時、その工場の事務室が改築中であつたので、いつもなれば、嚴重に戸締りの出来る特別の部屋で行われるはずの賃銀計算の仕事が、其日は、仮に支配人室の隣の応接間で行われたのであるが、昼食の休憩時間に、どうした物の間違いか、其応接間が空になってしまったのである。事務員達は、お互に誰か残ってくれるだろうという様な考えで、一人残らず食堂へ行ってしまつて、後には鞆に充満した札束が、ドアには鍵もかからないその部屋に、約半時間程も、抛り出されてあつたのだ。その際に、何者かが忍入つて、大金を持去つたものに相違ない。それも、既に給料袋に入れられた分や、細かいさつには手もつけないで、支那鞆の中の二十円札と十円札の束だけを持去つたのである。損害高は約五万円であつた。

色々調べて見たが、結局、どうも先程の新聞記者が怪しいということになつた。新聞社へ電話をかけて見ると、案の定、そういう男は本社員の中にはないという返事だ。そこで、警察へ電話をかけるやら、賃銀支払を延滞には行かぬので、銀行へ改めて二十円札と十円札の準備を頼むやら、大変な騒ぎになつたのである。